フジミドリシジミは 1910 年に富士山の中腹で発見されたことにちなんで命名されたもので、大学の後輩が採集した標本を見せてもらったのが初の出会いで 1968 年のこと。その後、加古川の里山・ギフチョウ・ネットのメンバーでカメラ撮影技術がプロ級の立岩さんや板野さんたちが見事な写真記録を披露してくれるのをうらやましく眺めるだけで、ゼフィルスの中ではいまだに最も出会えるチャンスが少ない種となっている。筆者にとって高嶺の花的希少種と位置付けられる本種に、意外な時期に偶然出会えたのが長野県下伊那郡の大鹿村。

July 23, 2014　大鹿村でフジミドリシジミに出会う

時期的にキベリタテハは無理だとしてもクジャクチョウには会えるかもしれないと、飯田からしらびそ高原へと向かって走ると、矢筈トンネル経由のルートが通行止めとなっているからとカーナビが大鹿村から地蔵峠を経由する大回りの迂回ルートを指示してくる。大鹿村経由でしらびそ高原へと向かうのは初めてで、これまでにないチョウとの出会いを期待して山道へと入る。途中、休憩タイムをとったカーブ地点で周辺をチェックしていると、妻が「頭の上の葉っぱに何かいるよ」と教えてくれ、ビデオカメラを準備してはっきり映像としてとらえると、何とウラキンシジミ。新鮮度は低いがまだ金色鱗粉は残っており、本種の撮影記録は初めてのこと。何度となくいいことが起こる地点で休憩タイムをとり、さらには思いがけないチョウを発見してくれる妻には感謝の気持ちでいっぱいだ。しらびそ高原では期待したクジャクチョウには出会えずアサギマダラをみただけで、帰路に再度このコーナーでチェックをすると、小さなチョウがフラフラと飛び出し、道路上に静止したかと思うとまた飛びそうな気配にネットインをして確認する。すると、なんと初めて実物をみるフジミドリシミのくたびれた♀。自然状態の撮影記録が撮れそうにないので放してやると、よろよろと飛んで道路下の樹の枝葉部分へともぐりこむが、その樹はまさしくブナの木で、このような高標高でもないところでもフジミドリシジミが発生することを知る。今にしてみれば痛みがひどい個体だからと撮影記録を撮らなかったのが悔やまれるが、できればこのブナの樹を目印としていつか発生時期にここにきてみたい。

June 7, 2023　来日岳（567m）に遠征

2019 年 6 月 18 日、ヒサマツミドリシジミにしても遅い時期の訪問で香川県から日帰りできたという男性が目の前でフジミドリシジミをネットインするのを見せつけられ、夕刻にはウラクロシジミが飛ぶのを見ただけで終わったことから、両者の発生にはいい頃かと日帰りででかける。高砂から 126km の来日岳へ、9 時半に出発し現地到着は 12 時半。14 時頃になってようやくフジミドリシジミと思えるゼフィルスが樹上の高い位置でチラチラと飛び始め、ビデオカメラの望遠でなんとか捉えられる位置で開翅姿勢をとる個体と、そこから飛び立つ場面を撮影できたが所詮証拠記録ていど。地元豊岡市在住の田中氏がやってきて高い位置で飛ぶフジミドリシジミは下までは降りてこないと話してくれる。標高が少し低い場所へと移動すると、高くはない部分でフジミドリらしき個体がときおりエメラルドグリーンの輝きを見せながら忙しい飛翔で少しずつ高い位置へと飛んでいく。ウラクロシジミに混じって飛ぶ個体を何度か目撃できるが速くて不規則な飛翔を眺めるだけ。

Copyright© 2008- Soft House JUMP. All rights reserved.